



## 「京都ライブラリアン・セッション」のご案内

個々がもつ知識やスキル・経験は、共有することによって、より深く広くなるはず。そんな考えのもとに、京都支部では下記のとおり「京都ライブラリアン・セッション」を開催します。事例発表、成果報告、研究報告等、あなたの経験や知識を発表してみませんか。

京都ライブラリアン・セッション

日時：2005年1月22日(土) 14:30-17:00

場所：京都市国際交流会館 1F 第1会議室

会場周辺および交通手段は8ページをご覧ください。

### 募集要項

応募資格：大学図書館問題研究会の会員であること

発表時間：30分(質疑10分を含む)

応募手続：発表テーマに800字程度の要旨を添えて、下記までお申込ください。

大学図書館問題研究会 京都支部 支部委員会(dtkk@rg7.so-net.ne.jp)

応募締切：2004年12月20日

採用可否：3件をめどとして、支部委員会で検討のうえ決定し、ご連絡します。

その他：

採用させていただいた会員の発表要旨は、京都支部のホームページ及び支部報にて公開させていただきます。

### [目次]

「京都ライブラリアン・セッション」のご案内	...	1
第35回全国大会(2004年横浜大会)参加報告 大図研全国大会(横浜)に参加して	...	2
第35回全国大会(2004年横浜大会)参加報告 ポータル分科会に参加して	...	3
数珠つなぎ 日文研で奥泉栄三郎氏「米国における日本研究の動向：データベースによる調査を中心として」を聴く	...	5
新支部委員の挨拶	...	7
臨時支部総会のご案内	...	8

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp (大学図書館問題研究会京都支部)

URL：http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm

## 第 35 回全国大会 (2004 年横浜大会) 参加報告

## 大図研全国大会(横浜)に参加して

村上 美代治

全国の大学図書館員が日頃の職場での実践活動を持ち寄り、分かち合い、更なる発展を目指す場が毎年8月に開催される大図研全国大会です。日々のルーチンワークから解放されて別の視点から自分たちの図書館を、あるいは自分自身の生き方を見つめ直すための場でもあります。全国大会の魅力は会場に入ると、参加者同士お互い久しぶりに会して図書館員であることの実感に浸ることができ、大会3日間を充実したものにしたと改めて思ってしまうことです。今年の参加者は関東という地の利もあり名簿によれば130人に上っていました。

今年の全国大会は、従来の大会運営方式を踏まえながらも改善するところは改善しようとする雰囲気がありました。研究発表・事例発表の盛り沢山の多さ、昼食を摂りながらのラウンドテーブルの開催などを挙げることができます。初めてのことであり、それぞれに課題を残した点もあったかと思いますが、概ね好評であったのではないかと思います。

さて、私は今回の大会に2つの課題意識を持って参加しました。1つは電子ジャーナル、電子ブック、データベースをはじめとする電子的図書館機能の向上に向けた取り組みと大学政策との関わりから新たな業務創造課題を見出すことでした。電子ジャーナルにおける私大図書館コンソーシアムの結成、NII や国立国会図書館の新たなサービスの試みなど、学術情報流通に関わる新たな政策が実施・推進されていくなか、個別図書館も高度な管理・運営が求められています。大学の個性化、多様化は図書館の高度化、差別化でもあり、個々の大学政策のなかで図書館の存在を明示していくためにも教育と研究を支援していくという命題に真摯に応えていく手法と方策が求められているからです。

もう1つは、今後の図書館政策を樹立していくにあたり、図書館サービスの広範な実践を支える「人」の問題です。効率的な運営と限られた資源の効率的最適配分こそ大学図書館の今日的課題と位置づけるならば、人的資源の有効活用は必要不可欠な課題であると思います。やむを得ず外部人的資源の活用を本格化させていく場合にも、管理運営の視点はもちろんのこと、図書館サービスの改善に向けた方策を積極的に示していくことが求められます。ここ数年アウトソーシングの導入(活用)事例などの講演や発表が官制の集会で数多くおこなわれていますが、導入即成功であったかのような報告がおこなわれています。果たしてそのように短期間に評価できる性格のものだろうかとの疑問を抱いています。アウトソーシングの導入は図書館ビジョン策定を通じて一種の政策課題に対応するものとして位置づけていくことが必要だと思います。人材受け入れ側である図書館のみならず、人材を送り出す側である企業の戦略や図書館労働市場への参入にあたっての課題認識、労働市場の実態と選考方法について詳しく知りたいと常々思っていました。図書館運営上、アウトソーシングの活用の如何が図書館の性格や機能の良し悪しを左右する程に大きなファクターになっており、改めて管理職をも含めた専任職員のあり方を人事政策の視点から検討することも必要であると思います。

この2つの課題意識から、ラウンドテーブルは「2. 電子ジャーナル/コンソーシアム」、課題別分科会は「図書館経営：アウトソーシング」、主題別分科会は「理工系」のグループに参加しました。ラウンドテーブルや分科会の内容については別の所で報告されると思いますので詳細は割

愛いたしますが、3日間にわたって13本の研究発表・事例発表を含めて非常に盛り沢山で、且つ中身の濃い内容であり視野を広めることができ、明日からの業務に反映することができるかと確信しました。

最後に全体会運営について一言述べておきたいと思います。鶴見大学会館という非常に素晴らしい施設を利用できたにもかかわらず、全体会が今一步盛り上がり欠けたことは否めないと思っています。例年どおりだと言われればそれでいいのですが、しかしながら、大図研が自主的な研究団体であり、個人会費でもって賄われていますので、公的な団体以上に次年度の活動方針についての議論を十分にしていける必要があると思います。個人加盟でもって成り立っている組織ですので、活動報告を踏まえた新たな方針や予算については全体会で活発な議論があっても良かったのではないかと思います。全体会での討議によって支部レベルにおける活動を促進することが可能になり、会員の拡大にも結びつくと思います。来夏の全国大会にあっては、「まずは全体会に参加を」という雰囲気づくりこそが大図研活動の更なる発展に繋がるのではないかと思います。

むらかみ みよじ (龍谷大学学術情報センター)

---

## 第35回全国大会(2004年横浜大会)参加報告

### ポータル分科会に参加して

谷山 秀幸

---

#### 始めに

以下では、今年の全国大会におけるポータル分科会に参加しての感想を書かせていただきました。実際の分科会の内容とは若干異同があるかもしれませんが、ご了承いただきたいとおもいます。

#### 分科会の概要

分科会は基調講演と質疑応答、若干の事例報告という形で進められました。基調講演は東北大学の米澤さんをお招きして「大学図書館が考えるポータル」との題字によりなされました。図書館ポータルの位置付けと事例紹介です。電子図書館サービスにおける図書館ポータルの役割について、図書館ホームページとの相違からの解説があり、福島大学、三重大学、明治大学、東北大学、京都大学などの図書館ポータルが事例として紹介されました。教育研究支援のための情報提供という目的設定の必要性が強調されました。また参考資料として国大図協のWG作成資料「電子図書館の新たな潮流」のポータルに関する部分も配布されました<sup>1</sup>。続く質疑応答～事例報告においては、ポータルとしてどのような例があるかといった話に止まらず、システム導入にあたってのID・パスワード等の管理、プロフィール毎の画面遷移の待機時間短縮、開発メーカーとの意思疎通等の話題があがりました。以下では、特に利用者パーソナライズ機能に関して感じたことについて触れたいと思います。

---

<sup>1</sup> なお東京農工大学図書館作成の「科学技術情報検索の実際」

<http://www.biblio.tuat.ac.jp/text/2004/html/index.html> の、第1章「電子図書館の新しい動き」も参照されたい。

### 図書館ポータル構成

いわゆる図書館ホームページ(トップページ)と図書館ポータルとの違いについては、明快な区分を課すことは容易ではありませんが、「目的」、すなわち「コンテンツ」と「対象者」の2点において区別することは可能である、とのこと。前者は学内外への広報を含めた情報発信を目的としており、後者は学内構成員に対する教育研究の支援推進となります。そのため提供するコンテンツとしては、図書館の概要・統計や紀要・論文、研究者情報などの図書館/学内情報を一般に「公開」するのに対して、2次情報DB・EJなどの大学が投資した情報資源を学内へ「提供」するという相違があります。さらに別の視点からは、ポータル機能の構成要素とは、利用者に接するインターフェイス部分(カスタマイズ、パーソナライズ等)、提供する内容=コンテンツ(2次情報DB、EJ等)、サービス機能(OPAC、サブジェクト・ゲートウェイ、ドキュメント・デリバリー等)、の三つにより構成されると考えることができるそうです。

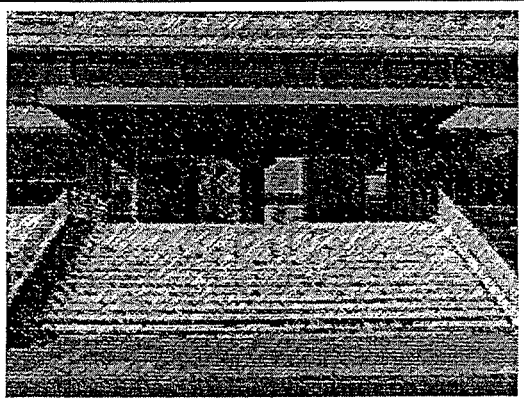
### パーソナライズ機能について

現時点では、貸出図書へのオンライン予約や返却通知、ILLのオンライン受付などのサービスの他に、SDIのような個人単位の要望に応じたサービスも出現してきており、上記3つの構成要素のうち、後半の二者により構成されている図書館サービスは多数あります。しかし、現在の趨勢はネットオークションやオンライン販売においては個人認証及びカスタマイズ機能がなくては成立しない、海外の大学においても図書館と大学全体とがシステム上で連携しており、しかも個人認証に基づくオンライン手続きで大学生活を送れる事例もあります<sup>ii</sup>。図書館サービスの分野にもインターフェイス部分のパーソナライズ機能も標準的なサービスであるとの「常識」が浸透してくるでしょうし、少なくとも個人認証機能だけでも先行させる必要があると感じます。但し、質疑応答でも提起された問題ですが、パーソナライズ機能は必然的にセキュリティ問題(プライバシー保護とネットワーク保守)とも絡んできます。例えば督促連絡用メールアドレスをオンラインで自由に変更することを認めた場合に、(考えたくはないですが)第三者のアドレスへ変更登録してしまう可能性も存在し、これに対しては窓口以外での変更を認めない運用も考えられます。もちろん個人認証技術の展開と共に解決するかもしれませんが、システム的设计段階で盛り込めるように将来の運用における個人認証情報の管理方法を十分に検討しておく必要があります。ヤフーの利用者IDなどのように利用者の自己責任にお任せする、と放り投げて良いのかどうか、悩ましいところでしょう。

たにやま ひでゆき (一橋大学経済研究所)

<sup>ii</sup> ニューヨーク州立大学バッファロー校の "What is MyUB?"  
<http://www.buffalo.edu/aboutmyub/> など。

ポータル(portal)  
 宮殿の表玄関、  
 橋やトンネルの入り口、  
 入り口、玄関、正門、門形



## 数珠つなぎ

日文研で奥泉栄三郎氏「米国における日本研究の動向：  
データベースによる調査を中心として」を聴く

黒田 りん

私が国際日本文化研究センターに行ったのは、シカゴ大学日本資料司書の奥泉栄三郎氏の講演「米国における日本研究の動向:データベースによる調査を中心として」を聴講するためでした。奥泉氏は、現在シカゴ大学の日本研究司書です。奥泉氏は慶応大学図書館情報学科を卒業後、メリーランド大学プランゲ文庫の整理に慶応大学から派遣され、その後約30年間アメリカで過ごしておられます。慶応大学からメリーランド大学に派遣された経緯は、メリーランド大学が図書整理のために図書館学を大学レベルで学んだ人を欲しいと日本に言ってきたが当時それに応えられるのは慶応大学の日本図書館学校位だったので派遣されるのが慶応大学出身者ばかりになったということです。そもそも学校自体 GHQ と ALA が作っていて、アメリカから来た講師に通訳が付くという授業だったそうなのでその点も他の学校より適当だったのではないかと思います。

講演では、「日本研究博士輩出数の推移のグラフ」、「米国における最初期の日本研究博士論文」の紹介、「日本研究トップ10大学における博士輩出数(各大学創設以来の蓄積結果)」、「日本研究トップ10大学における博士輩出数(5カ年調査:1999年-2003年)」、各大学の日本研究関連の Ph. D. が取得された専攻分野の分析、「日本研究トップ10大学〈教授数順位〉」「日本研究トップ10大学博士課程在籍数順位」などが説明されました。日本研究博士の博士取得の状況とその専攻分野についての分析がこの講演のテーマでしたが、その結論としては、前者が、日本研究の博士取得の状況について、トップ10大学以外ではそうではないが、トップ10大学の博士課程に在籍している者は博士を取得する傾向が強い、後者は、選考分野には必ずしも東アジア学科のような分野に偏っているわけではない、ということでした。これは以下の質疑応答を聞いていてその原因がわかってきました。

講演後、質疑応答があり色々な質問がなされました。例えば、日本研究学科の現状について質問がでましたが、予算はそれほど削られていなくて、3%くらいの物価高に合わせた予算が付いているところがほとんどとのこと。また有名な先生が退職した後に若い研究者を2人雇って専攻分野を増やしたり、学生受けするような専攻分野の研究者を入れて学生が多く来るようにしたりしているようです。そのため日本研究といえば伝統的に、歴史や純文学を扱うものでしたが、最近ではアニメやおもちゃ、現代アートなどの社会学の領域のものを扱う研究が増えてきているようです。このようなトピックの変化で資料購入も何か変わったかという質問も出ました。奥泉さんの答えは、日本研究の基本書を揃えるという伝統的なアプローチもしているが、一方で最近では日本研究に関係ないものだが日本語で書かれているものを収集するようになっているとのこと。たとえば、日本研究以外の分野でワールドワイドな研究成果があった場合にはそれが日本語で書かれていても読みたいという要望があるので購入します。日本の研究レベルが国際レベルになってきているということもあるようです。このように最近では日本研究の分野ではないが、日本語で書かれた資料の購入も増えているようです。

しかし一方で、日本研究をしている研究者で日本語がわからない人も増えてきているようです。これは大学に日本研究オンリーの研究者の就職先が少ないため日本研究をメインでやるのではな

くて別の専門分野で Ph. D. 取得+日本研究という形でやる人が多いからだそうです。日本研究で Ph. D. をとって日本研究で就職できるのはトップ 10 大学出身者で、それ以外の大学出身者は何年も時には十数年もアルバイトをして研究をしていかなければならない過酷な状況のようです。このような日本研究の就職状況のため、前々段落の奥泉氏の分析結果になるというわけです。

奥泉氏はプランゲ文庫のパイオニア的存在ですから当然ですが、日本研究の現状についての質問とは別にメリーランド大学のプランゲ文庫についての質問も多くありました。たとえばプランゲ文庫の概要について教えてくださいという質問が出ました。メリーランド大学のゴードン・W・プランゲ博士がたまたま日本に来ていた時に廃棄されかかっていた検閲資料を勤めていたメリーランド大学に納めてくれるように頼んだというのが文庫ができるきっかけでした。その後大学に10年ほどそのまま置かれていましたが、日本人のインターンシップで整理をし出しました。そして仕事を覚えたら次のインターンというように慶応から何人か人を呼び、その後専任を置くことになりました。それで奥泉さんは8年くらいやっただとおっしゃっていました。

メリーランド大学にプランゲ文庫についてのページありましたので引用します。ページのアドレスは以下です。http://www.lib.umd.edu/prange/html/introduction.jsp

「プランゲ文庫とは？」

(中略)

プランゲ文庫には第二次世界大戦後 1945 年から 1949 年までに日本で出版された印刷物のほとんどが所蔵されています。資料の内容はこの時期に考えられるすべての分野に及び、資料の種類は図書、パンフレット、新聞、雑誌、報道写真、ポスター、地図と多岐にわたっています。さらにこの時代に関連する英文書類も同文庫には所蔵されています。

新聞	18047	タイトル
図書とパンフレット	約 71000	タイトル
雑誌	13799	タイトル
報道写真	約 10000	枚
ポスター	90	枚
地図	約 640	枚

プランゲ文庫を構成する日本の出版物は連合軍総司令部(GHQ/SCAP)の民間検閲局(CCD)に保管されていた資料です。1945年から1949年までCCDに所属する新聞・映画・放送部門(PPB)の検閲官が日本の出版物を検閲し、違反があれば検閲処分がとられました。プランゲ文庫には約600,000枚に及ぶ検閲関連文書が残っています。」

他には、プランゲ文庫のアメリカでの研究状況について質問が出ましたが、アメリカではプランゲ文庫のマイクロフィッシュのコンプリートを買っているところはないようです。日本では国際日本文化研究センター(雑誌)、国立国会図書館、早稲田大学20世紀メディア研究所(非公開)が持っているようです。日文研は他の機関に比べて利用しやすいためか、利用が増えてきているそうです。また、NDL-OPACの雑誌記事索引で「プランゲ」で検索したところ、「～1983年」で3件、「1984～1995年」で4件、「1996～2000年」で17件、「2001年～」で21件ということですので論文数は増えています。早稲田大学の20世紀メディア研究所がDB化を進めているようなのでこれからも研究がどんどん増えていくかと思われます。

国会図書館のホームページでプランゲ文庫について名前だけは知っていたのですが、その成り立ちや関わった人々、蔵書内容についてはよく知りませんでした。それを、整理したご本人からエピソードも含めてお話しを聞くことができ勉強になりました。司書としてどういう風にやっ  
ていくかということ先輩の方々に聞くことは興味深いことですが、若手の中で関心が高い海外  
の図書館で活躍しておられる奥泉氏には更に敬意を感じます。故郷の出身者にコロンビア大学の  
著名な学者がいた、というのがアメリカでやっていこうと思ったきっかけになったと奥泉氏がお  
っしゃっていました。やはり先達はあらまほしき、ということです。今後大学図書館でも国会図  
書館のように長期にわたる海外派遣や、奥泉さんのような方を招いて指導いただく機会があれば  
大学図書館の司書の海外進出ももっと進むのではないかと思います。

くろだ りん (京都大学附属図書館)

## 新支部委員の挨拶

渡邊 伸彦

みなさま、初めまして(という方が殆どだと思いますので)。京都大学文学研究科図書館の渡邊  
と申します。今期から支部委員として活動に参加させていただくようになりました。まだまだ至  
らない点ばかりだと思いますが、よろしくご指導ご鞭撻の程、お願いいたします。

しかし、昨年10月に就職してから一年足らず、巡り巡ってこんなところで一筆書かせていた  
くようなことになっているのですから、人生とはわからないものです。まさに「縁は・・・」と  
いったやつなんでしょうか。それでも、折角参加させていただくことになったのですから、もっ  
と京都支部を身近に感じてもらえるようにがんばりたいと思います。まあ、当面の私の課題は人  
の「名前」と「顔」と「プロフィール」をちゃんと覚えられるようになる、といったところでし  
ょうが(苦笑)。

関係ありませんが、最近私について発見したことが一つ、「趣味」というものは難題だという話。  
私には格別「これが私の趣味です」というようなものはありません。確かに本や漫画を読むのも  
ビデオを見るのもゲームをするのも好きですが、殊更「趣味」とするほどではありません。しか  
し、どうしても初めての場ではこの「趣味」というやつを訊かれることが多く、その度に困っ  
てしまいます。おそらく「好きなことは？」と訊かれれば「ぼーっとすることです」とか答えるで  
しょうが(笑)、これを「趣味は？」と訊かれたときにそのまま返せば、ちょっと不思議な顔をさ  
れてしまうでしょう。第一、それ以上会話が弾まなそうですし(苦)。そうすると、折角という  
話題を振ってもらっているからには、なんなり会話が弾むような「趣味」を言いたいものです。  
しかし、私にはそのような「趣味」のストックもない。これは大変な問題だと気がつかされた訳  
です。まあ、当面どうすることもできないでしょうが、いつかはどこぞの釈由美子のように、「特  
技は裸です」くらいの意外性をもって紹介できるようになりたいものです。

というわけで(どういうわけだかわかりませんが)、今期一年、よろしくお願いいたします。

わたなべ のぶひこ (京都大学文学研究科図書館)

# 臨時支部総会のご案内

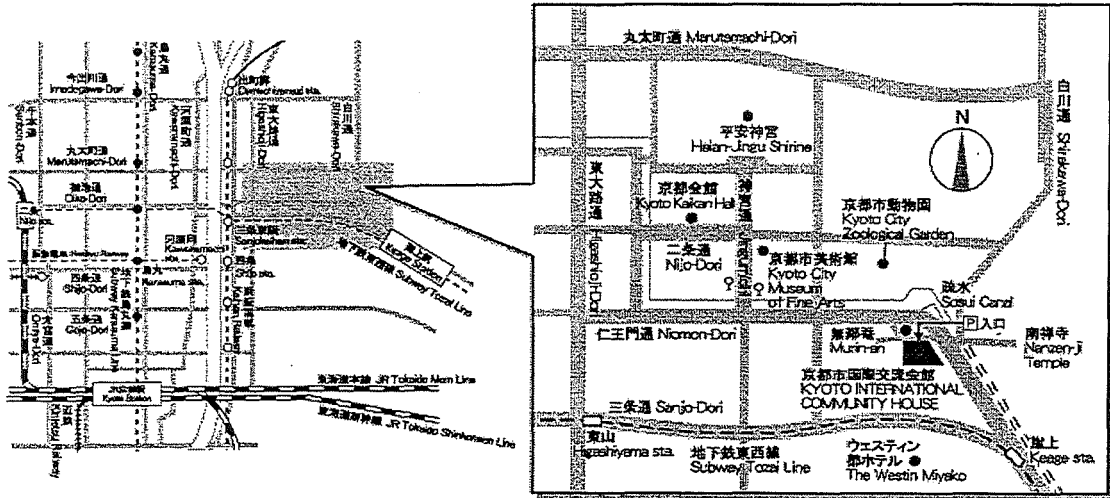
支部活動を一層確かなものにするべく臨時支部総会において、支部規約を制定することにしました。総会議案である支部規約(案)は後日、支部報およびMLゆりかもめにしてお届けいたします。臨時支部総会后に開催いたします京都ライブラリアン・セッションと合わせご参加ください。

臨時支部総会

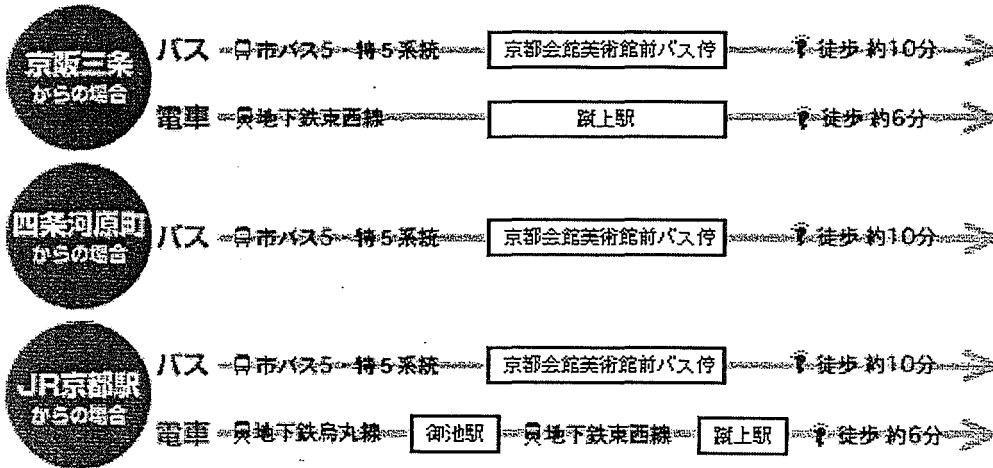
日時：2005年1月22日(土) 13:30-14:30

会場：京都市国際交流会館 1F 第1会議室

会場周辺(「京都市国際交流協会/会館へのアクセス」<http://www.kcif.or.jp/jp/footer/05.html>より)



交通手段(「京都市国際交流協会/会館へのアクセス」<http://www.kcif.or.jp/jp/footer/05.html>より)



## 編集後記

木枯らし一番も吹き、季節は秋から冬に移り変わろうとしています。ファンヒーターも出し終え冬支度は万端です。あとはあたたかいお風呂とホットカルピスがあれば言うことありません。

(tsuna)